

原子力が批判されることはあっても電力が批判されることは滅多にない。振り返れば、ダムが批判されることはあったが水力が批判されたことはなかった。放出物が批判されることはあったが火力が批判されたこともなかった。もちろん太陽光エネルギーと風力はいつも批判されず、蓄電装置や風車設備ですら無垢なるものとして扱われている。総じて、発電所(Kraft-werk, Power-station, Power-plant, Centrale) が批判されることはあっても、力そのものが批判されることはない。つまり、ほとんどの人は、それがどんな体制であれ、ソヴィエト+電化よろしく、+電化だけは深く信じている。電力への意志？ 自然力への意志？

労働と区別される限りでの労働力についても、ほぼ同様のことが指摘できそうである。近年、労働についての議論には二つの傾向が見られる。一つは、賃労働を典型とする労働の外延を可能な限り広げようとする傾向である。その都度の外延拡大の政治経済的な狙いは異なるが、障害者の生活も労働、家事も労働、消費行動も労働、社会活動も労働という次第である。もう一つは、労働を生産労働の中のより狭い範囲に押し込めようとする傾向である。そのとき、労働を生産労働と規定するなら不生産労働にあたることを、労働を対象化活動と規定するなら非対象化活動にあたることを、労働の軛を免れた活動として称揚しようとする傾向である。ところで、これら二つの傾向は共通して、それが労働であろうとなかろうと、そこで発揮されると目される人間の力を肯定して疑うことがない。そして現在、その人間の力は、単なる生理的支出として語られるのではなく、人的な能力・資産・資本としても、ポイエシスかつプラクシスとしても、しかも共同資産・コモンとしてすら肯定され直されている。ほとんどの人は、戦時期の全般的労働制・総動員よろしく、その否定的な要因をかき消された限りでの労働の力を信じている。労働力への意志？ 活動力への意志？

現在、ハイデガーの技術論が重要であることは言うまでもないが⁽¹⁾、技術論は電力や労働力、自然力といった力そのものについてもそれとして論ずるものでなければならぬだろう。では、ハイデガーの技術論において、電力や労働力、自然力はどう位置づくのだろうか。電力、労働力、自然力は、いかなるモノなのだろうか。電力や労働力についてはいとも簡単に再生産と語られ、あたかもそれらが生産物であるかのように思わされているわけだが、それは本当だろうか。電力や労働力はさまざまな論脈に埋め込まれているわけだが、自然力はそこからどのように区別されるのであろうか。あるいは、区別は無理であろうか。また、放射(能)はいかなるモノなのだろうか。被爆や被曝とはいかなる経験なのであろうか。例えば、こんな具合にして、ハイデガーの技術論に対して向けられる問いは、従来以上に広げられ具体化されなければならないだろう。発表では、1930年代半ばから戦後期にかけてのハイデガーをめぐる、主として以下の点について考えてみたい。

■労働について

貴重な先行研究を踏まえつつ⁽²⁾、学長時代前後の労働観・社会主義観をもっと重視し、いわゆるシュタウディンガー事件⁽³⁾の意義を少し別方向に過大視して、戦時期から戦後期へのテクノクラート⁽⁴⁾に対する批判の筋を取り出すことを試みてみたい。同時に、芸術作品制作の上昇をめぐる諸説を整理し直して評価してみたい。

■ Ge-stell について

先行研究は膨大であるが、自然・力・ピュシスとの関係についてあらためて考えてみたい。端的に言うなら、かくも電力や労働力に拘泥させ束縛させるもの（持続可能性！）こそが Ge-stell と術語化されていると捉え返してみたいわけだが、そのとき解釈上の検討も欠かせないことになる。その上で、Ge-stell を現在に適用できる場面を精確に見定めてみたい。

■ 技術批判・時代批判について

結局のところ、危険のあるところに救済者が育つとはいかなる謂いであるのか。現在は過渡期であるわけだが、それに対する態度をどうとるべきなのか。ハイデガーに学べる予感があるので、そこを端的に言いあらわすように努めたい。なお、ハイデガー技術論に対してときに加えられてきた非難、反近代主義・反技術主義・復古主義・農本主義・ギルド主義・反進歩主義・反動主義・保守革命主義・ユートピア主義であるとする非難について、それは一面的な理解に基づくものであると思う一方で、私自身はそれらの主義を（一面では）肯定しており、そうした決めつけは（私にとっては）何ら非難にならないということを書いておきたい。

註

- (1) 3・11 と 3・12 の後、ハイデガーへの言及はしばしば見られた。一つだけあげておく。堀尾正毅「3-11 原発事故の後、現代技術と人間の関係をどう考えるか——ハイデガー技術論との対話の中から」『龍谷政策学論集』第1号（2011年）。
- (2) 轟孝夫「ハイデガーにおける労働の概念について——ナチズム加担問題の再検討」『倫理学年報』第51集（2002年）。Michael Zimmerman, *Heidegger's Confrontation with Modernity: Technology, Politics, and Art* (Indiana University Press, 1990).
- (3) フーゴ・オット『マルティン・ハイデガー——伝記の途上で』北川東子他訳（未来社、1995年）、シルヴィオ・ヴィエッタ『ハイデガー：ナチズム/技術』谷崎秋彦訳（文化書房新社、1997年）、奥谷浩一『ハイデガーの弁明——ハイデガー・ナチズム研究序説』（梓出版社、2009年）。
- (4) 小野清美『テクノクラートの世界とナチズム——「近代超克」のユートピア』（ミネルヴァ書房、1996年）、中島毅『テクノクラートと革命権力——ソヴィエト技術政策史 1917-1929』（岩波書店、1999年）参照。